

審 査 結 果 の 要 旨

論文題目 「術前顎矯正装置を用いた早期口蓋形成術の長期言語成績に関する研究」

学位申請者 花井 潮

本論文は、は術前顎矯正装置を用いて生後 6 ヶ月で行う早期口蓋形成について、その後の患児の鼻咽腔閉鎖機能と構音機能、および顎発育を 10 年間に渡って評価したものである。

本論文では従来本邦で多く行われている生後 1 歳以降での手術と比して、鼻咽腔閉鎖機能に遜色はないこと、一方構音機能は全例が正常構音で、通常しばしば見られる口蓋化構音、声門破裂音など口蓋裂児に多い異常構音は認めなかった事が示された。顎発育に関しては、成長発育の盛んな乳児期の手術であるにもかかわらず、生後 1 歳以降の手術におけるものと遜色が無かった事が示された。今回示された言語と顎発育の総合的術後成績からみて、本プロトコールが口蓋裂患児の長期予後を今後大きく改善させる可能性を示した貴重な論文と考えられ、博士論文に十分値すると思われる。

今回の論文について、以下のような質問を行った。

1. 比較対象とすべき結果は存在するか
2. 構音の異常、正常の評価はどのように行ったか
3. 低年齢であるがゆえに、術後の合併症として、鼾や睡眠時呼吸障害はなかったか
4. 言語成績以外に、精神発達などにおける優位性はないか
5. 本研究における正常構音の定義
6. 鼻咽腔閉鎖機能評価の聴覚的印象結果と、その取り扱いについて
7. 本口蓋形成術による口蓋前方知覚への影響について
8. Latham 型術前顎矯正装置の作成に必要な印象採得や装着法についての質問
9. 創部の治癒状態（裂隙部の骨形成等）についての質問
10. 顎発育障害に関して、本方法と他の治療法との違いについての質問
11. 本方法の発展と将来の展望について

すべての質問に対して自らの研究成果と文献的考察を含めて正しく回答され、この術法が小児の口蓋裂の患者に有用であることを示されたことから、価値ある論文内容と考えられた。その他の委員の質問に対しても、自らのデータおよび過去の論文、知識に基づき、わかりやすく論文内容を説明し、的確に回答されたことから、博士の学位を授与するのに十分な資格があると判断された。今後、益々、発展されることを期待したい。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。したがって、申請者 花井 潮 は東海大学博士（医学）の学位を授与されるに値すると判断した。

論文審査委員

主査 博士（歯学）	太田 嘉英	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員 博士（医学）	赤松 正	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員 博士（医学）	望月 博之	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）

委員	博士（歯学）	唐木田一成	医学部准教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	博士（医学）	小山 祐司	医学部准教授	（医学研究科先端医科学専攻）